

弘末：続きまして、ご報告に入らせていただきます。一番目のご報告は鈴木佑記さんのモーケンの事例でございます。マレー半島中北部にモーケンと呼ばれる海洋民の人々が住んでいることが、昨今テレビでも取り上げられております。鈴木さんはここをフィールドとして研究を進められてきました。今回は、2004年のそこの津波への対応の事例をご報告いただけるということでございます。それでは、鈴木さんどうぞよろしくお願いいたします。

鈴木：こんにちは。私の報告では「海と民話と高台と：2004年インド洋津波を回避したモーケンの事例」と題しまして、これまで調査に入っていたスリン諸島モーケンの災害文化について取り上げたいと思います。

その前に、この報告の結論を先に述べてしまうと、災害文化だけを見てはだめなんじゃないか、物理的側面にも目を向けてはじめて、災害文化は防災に役立つということと話したいと思います。災害文化に注目しようとしているこのシンポジウムの全体の腰を折るようで申し訳ないのですが、そのような発表をしたいと考えています。ただし、これから話す内容というのは、災害文化全般に当てはまることではなくて、あくまで津波に対する災害文化について言及しているものだととらえてください。

1. タイにおける被災の概要

それでは、2004年インド洋津波の被災状況について簡単に説明したいと思います。先ほど、高藤さんが既に紹介してくれましたが、2004年12月26日、今日から8年と5か月前にスマトラ島沖を震源地とする地震によって発生した津波が、14か国以上に到達しました。これから話で取り上げるのは、タイです（図1）。実は意外と知られていないのですが、スマトラ島からそれほど距離が離れていないところにタイはあります。津波が発生

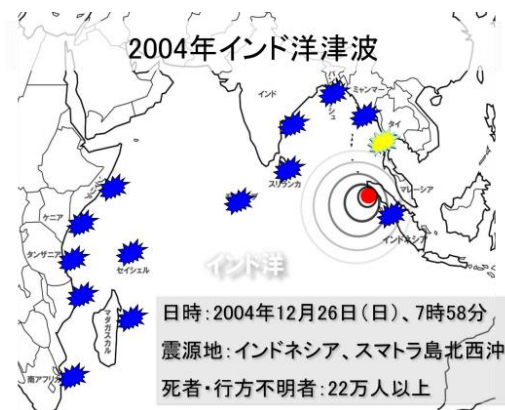


図1 2004年インド洋津波

したのは7時58分ですが、タイに到達したのがそれから2時間後の10時ぐらいです。津波の大きさについて、いくら言葉で説明しても分かりにくいと思うので、ここではタイで被害が最も大きかった地域の1つ、カオラックの状況を映像でご覧いただきたいと思います。

撮影者がタイ語で話しています。「このような波が来るのは、タイで初めてのことです」と説明しています。この映像、ちょっと分かりにくかったと思うのですが、最初に潮がグーっと引いて砂浜があらわになった後に、白波の塊がどっと海岸に押し寄せるといった大きなものでした。観光地として有名なプーケットで大体5mほどの津波高があったらしいのですが、カオラックでは10mを超えたと言われています。

津波が残した爪痕というのはとても大きいものでした。写真1は、タイで最も被害の大きかったナムケム村で撮影したものです。漁船が内陸に打ち上げられている様子です。写真2は、



写真1 ナムケム村内陸の漁船



写真2 カオラックのホテル

〔ソムマーイ先生 撮影〕(2004年12月)

カオラックで撮られたものですが、瓦礫のずっと奥に海が見えます。この場所にはホテルが建っていて、海岸から大分離れていたにもかかわらず、このように津波で鉄骨が折れている様子が見てとれます。

これから私が報告するのは、カオラックからあまり離れていない場所にあるスリン諸島という島です。なお、私の次の報告する西田さんが調査したのは、先ほど漁船の写真で示したナムケム村というところになります。

タイの被災状況を確認めます(資料1)。ここでは被災者数を載せていますが、一番被害が大きかったのがパンガー県でした。その次にプーケット県、クラビー県と続いていまして、これら3県が主な被災地でした。3県に共通している特徴として、いずれも有名な観光地があるという点を指摘することができます。プーケットに関しては説明を省きます。クラビー県には、レオナルド・ディカプリオ主演の映画『ザ・ビーチ』の舞台となったピピ島があります。また、パンガー県はあまり有名じゃないかもしれませんが、世界中のダイバーが集まるシミラン諸島など、ダイビングスポットがたくさんある場所です。こうしたところに被害が集中したというわけです。

また、12月下旬ということもあって、クリスマス休暇あるいは年末年始を過ごそうとしていた国外からやって来た人々がたくさんいました。タイの被害の特徴の1つとして、外国人ツーリストが多く被災したという点を指摘できます。

資料1 タイにおける被災者数・被災の概要

県	死者				行方不明者		
	タイ人	外国人	国籍不明	計	タイ人	外国人	計
ラノー	153	6	0	159	9	0	9
パンガー	1,389	2,114	722	4,225	1,352	303	1,655
プーケット	151	111	17	279	245	363	608
クラビ	357	203	161	721	314	230	544
トラン	3	2	0	5	1	0	1
サトゥーン	6	0	0	6	0	0	0
合計	2,059	2,436	900	5,395	1,921	896	2,817

死者・行方不明者：8,212人(タイ人3,980、外国人3,332、国籍不明900)

ただ、こうした観光地として有名な地域に住んでいるにもかかわらず、事前に海の異変に気付いて高台に上がって助かった人々があります。それが、これから報告するスリン諸島のモーケンなのですが、どうして助かったのかについて話す前に、そもそもモーケンというのはどういう人々なのか簡単に紹介したいと思います。

2. モーケンについて

今会場にいらっしゃる方のなかには、モーケンという民族名称を聞いたことのある人がいるのではないのでしょうか。そういいますのも、2010年ごろからテレビのバラエティ番組でよく取り上げられているからです。大学でモーケンについて講義する機会があるのですが、学生のなかにも知っている人がちらほら出てくるようになりました。ただ学生の多くはモーケンに関する間違っただ情報をもとにしている傾向にあります。つまり、「海の上で一生を過ごす人々」がモーケンであると勘違いしているのです。バラエティ番組がそう紹介しているので学生たちが勘違いしているのですが、ただし、これから話すように、モーケンは必ずしも一年中海上で暮らしているわけではありません。

モーケンの生活域は図2の灰色で塗られた部分です。この海域を拡大しますと、モーケンの生活している地域というのは、北はミャンマー領のベイから、南はプーケット島まで広がっていることがわかります。この地域の特徴としては、島が800以上あるという点です。そうした島々を船に乗って移動して生活していたのがモーケンです。

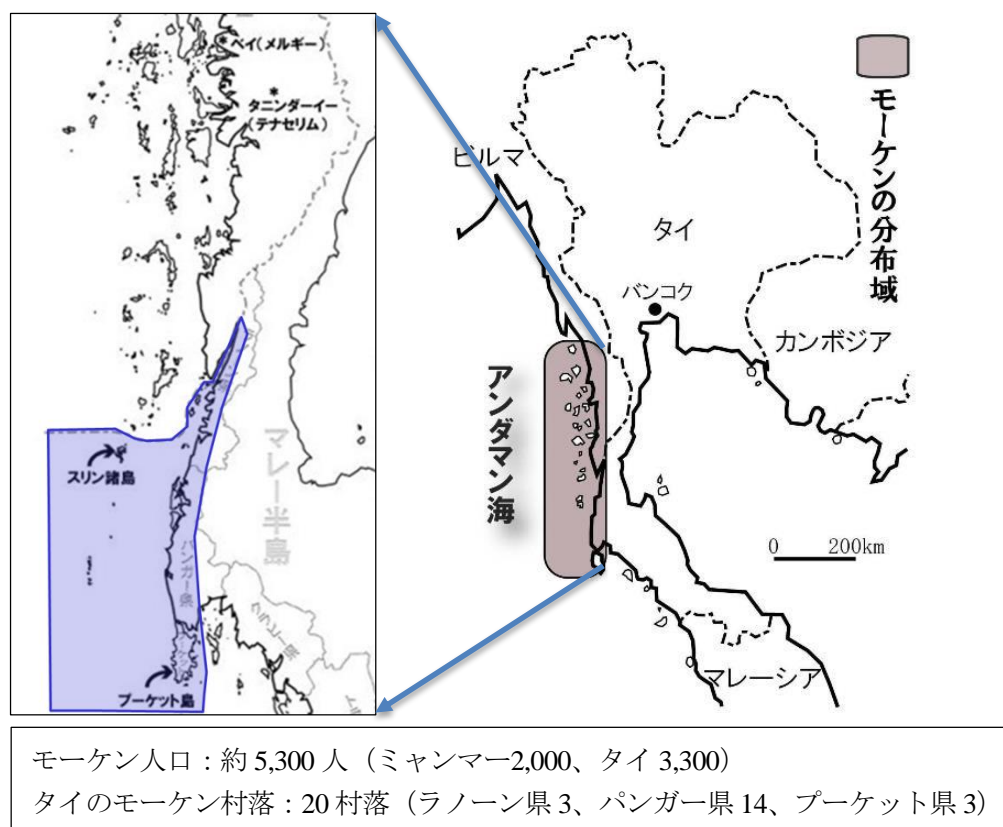
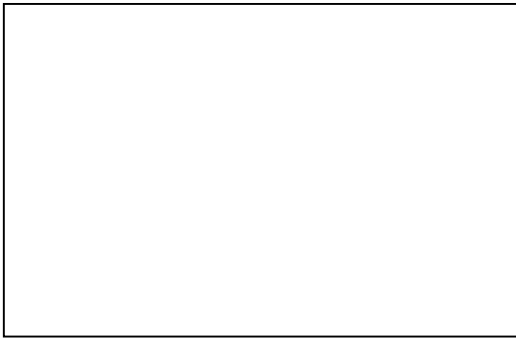


図2 モーケンの分布域



ミャンマー領でどれだけのモーケン村落があるのかは分かっていないのですが、2010年の時点でタイ国内には20村落あることを確認できています。モーケンの伝統的な生活は、乾季と雨季で異なります。乾季というのは北東モンスーンがアンダマン海域に吹き込む時期で、比較的穏やかな風と、波が荒れていない季節です。海が穏やかなこの時期は、約100年前に撮影されたこの**写真3**のように、船に一組の夫婦とその子どもたちが乗って、島々を移動しながら魚を取って過ごしていました。

写真3 乾季（11月～4月）のモーケン

〔Walter G・White 撮影（1922年頃）〕

した。

もう一方の雨季である5月から10月の間は、風の向きが180度変わって南西から吹き込むようになります。その風がとて強くて漁になかなか出て行けないような日が続くので、この半年間は島あるいは沿岸部の砂浜に、**写真4**のような長い杭を支柱とした簡素な家屋を建てて生活していました。

こうした生活を1900年ごろ、大体100年ほど前にやめて陸に上がった人たちが出てきましたが、それでもまだ多くのモーケンはそのような生活を送っていました。モーケンにとって大きな環境の変化が起きたのが1980年代に入ってからです。

スリン諸島が1981年に国立公園に指定されたのを皮切りとして、モーケン村落が集中している地域がどんどん国立公園に指定されてしまったのです。国立公園内には基本的には人が住んではいけない、また木を切ってはいけない、狩猟採取も認められないということになっています。つまり、モーケンがそれまで住まいとしていた船、あるいは生活していく上で魚を取るために移動手段としていた船も造船できなくなってしまったのです。それまで自由にできていたことが、国立公園化がすすんでできなくなってしまいました。その結果、まだ船の上で暮らしていたモーケンも皆、移動と漁労に制限が加わったことで定住化していきました。

私がこれから取り上げるスリン諸島のモーケン村落も、そのようにして1980年以降に形成されたものです。スリン諸島の位置について改めて確認しておきたいと思います（**図3**）。スリン諸島は首都バンコクから直線距離にして大体720kmほど離れた場所に浮かんでいます。日本でいうと東京から九州ぐらいの距離となります。

この島の周りの風景は**写真5**のように非常にきれいな海に囲まれているのが特徴です。乳白色になっている部分がサンゴのリーフでして、タイでは一番大きなサンゴのリーフに囲まれている島として有名です。

先ほど、国立公園に指定された土地に人が住むのは認められていないと述べましたが、スリン諸島のモーケンだけは特別扱いされています。国立公園に指定される以前からこの地域、この海域を利用してきたモーケンに対しては、自給自足をするための漁だけは許してあげよう



写真4

雨季（5月～10月）のモーケン

図3 参考地図 [鈴木佑記 作成]

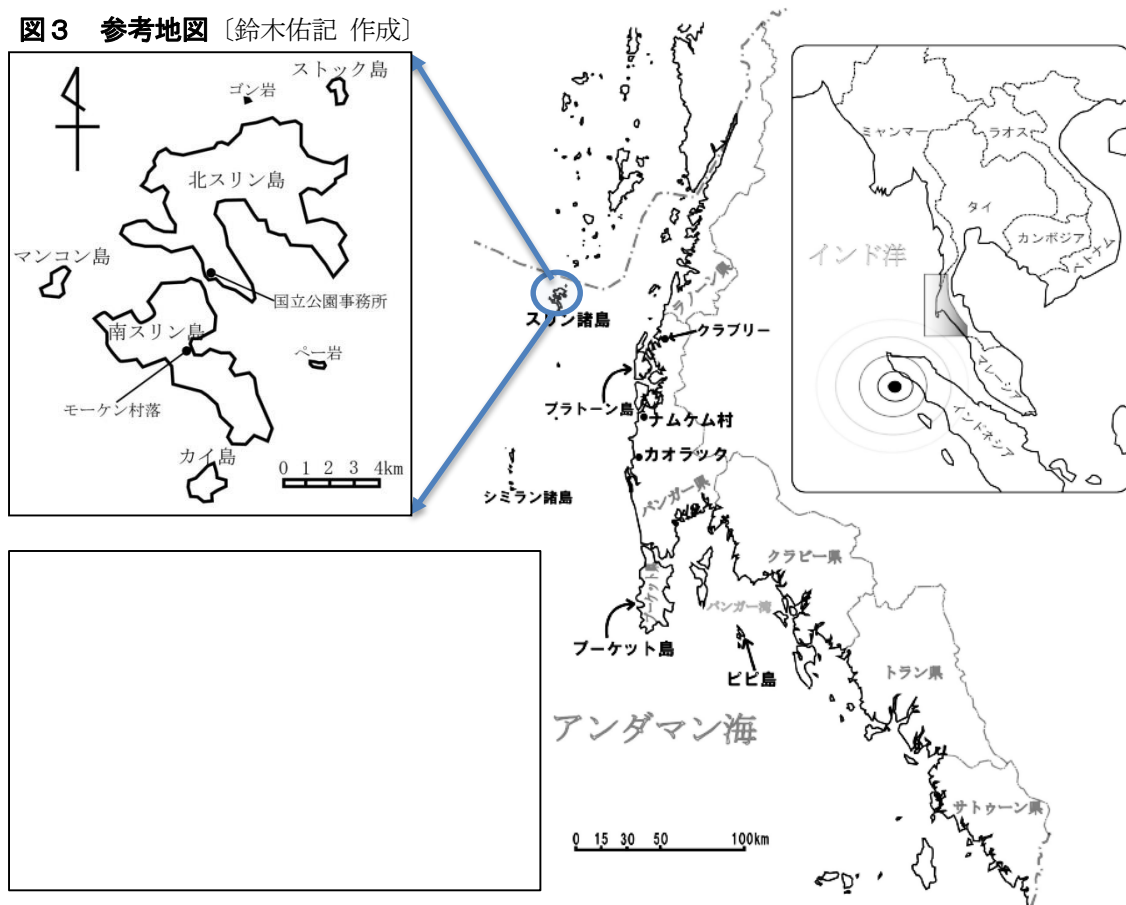


写真5 スリン諸島 [タイ政府観光庁 HP より]

ということで、タイ政府によってモーケンが暮らすことは認められています。現在でもスリン諸島では、モーケンが漁労を生業として暮らしております。スリン諸島のモーケンは、恐らくタイでは最も海と密接な暮らしをいまだに維持している集団です。

3. スリン諸島に暮らすモーケンの災害文化

海沿いで暮らしていたモーケンですが、2004年末の津波によって家屋が倒壊し、船も全てなくなりました(写真6、7)。物的損害が大きかったことが分かります。その一方で、人的被害はありませんでした。それでは、どうやって助かったのか。それはこれから紹介する、モーケンのなかで共有されているある言い伝えが関係しています。朝日新聞では、「異常な引き潮を見たら山へ逃げろ」(朝日新聞 2005年1月10日)というように紹介されていますが、モーケン語では、「潮が急に異常に引いたらラブーンが来る」という言い伝えが残されていました。まさしく、先ほど高藤さんがシムル島のスモンの話で言っていたこととほとんど一緒の話が、モーケンの口頭伝承のなかにも確認できるのです。「ラブーン」というのは、モーケンの民話の中で登場する全世界が洪水状態に陥るような高波を表しています。つまり、モーケンが過去にも津波を経験していて、それを口頭伝承として伝えて、いわゆる災害文化が形成されていたからこそ助かったわけです。このモーケンの逸話は、各国のメディアが注目し、取り上げました。

タイ人の研究者は「モーケンのような自然に対する意識が発達した文化こそ最良の津波警報



写真6 被災前の様子



写真7 被災後の様子

システム」(日刊紙 Maticchon 2005年1月11日)と発言しています。津波が起きた後にタイ国内各地で津波警報塔を建てようという動きがあったときに言及したもので、津波警報塔を建てるよりもその前に、モーケンのような自然に対する意識を発達させた文化を持つと訴えていました。つまり、海に関する知識や過去の経験の伝承を持つことに対して評価していると言えます。

4. 災害文化が活かされるために

このように災害文化を取り上げて評価するということが自体は反対しないのですが、ただモーケンから話をいろいろ聞いてみると、災害文化だけを取り上げて意味がないのではと考えるようになりました。特に人文社会科学系の研究者が、災害文化だけを強調してもあまり意味がないと思うのです。どうしてそのように思うようになったのかを説明するために、次に、津波が来襲したときの状況を説明している2人の語りを取り上げたいと思います。

1人は、「潮が遠くまで引き、ウツボや魚が砂浜に残されてシャコが一気に穴から出て来た、その後急いで、ラブーンが来ると思ったので裏山に逃げた」と語っていました。また別の人物は、「通常ならば潮が満ちてくる時間帯だったけれどもなぜか引いていた。これはおかしいということで、すぐに、昔来たラブーンがまた来ると気づいて、村人に伝えて山を駆け上がった」と語りました。

ここで注目したいのが、「裏山」あるいは「山」と語った部分です。つまり、このスリン諸島のモーケンに関して言うと、村落のすぐ後ろに高台があったというわけです。どういうことか、他のモーケン村落と比較して話したいと思います。

写真8は、これから西田さんが報告するナムケム村地区の衛星写真です。この衛星写真で注目してもらいたいことは、海岸線から緑色になっている部分、つまり森林帯までの距離です。海岸から一番近い高台となっている場所までで2kmほどあることが分かります。また、離れている場所からだと、4kmほど逃げないと高台にたどり着けないことが分かります。このように、高台から離れている場所であることが、ナムケムの被害を大きくした要因の一つと考えられるのです。

一方、スリン諸島は急勾配の小山で形成されています。**写真9**はモーケン村落がある部分を拡大したものです。村落のすぐ後ろに木々が生えているのが分かります。この部分がすでに高台となっているわけです。

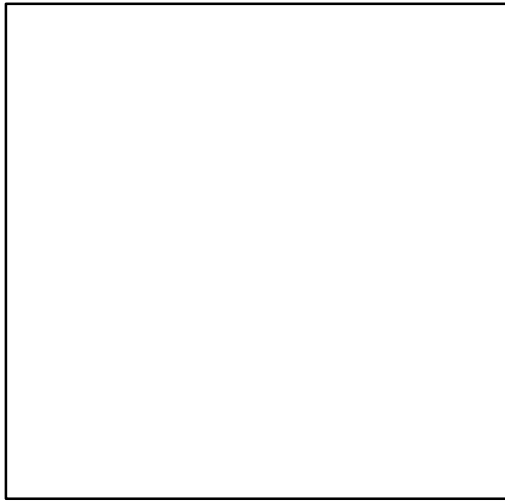


写真8 ナムケム村地区の衛星写真

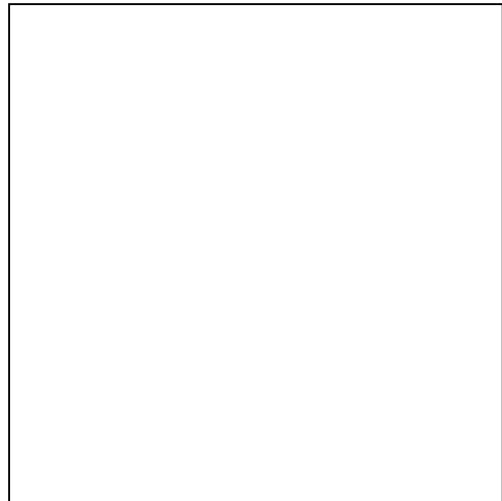


写真9 スリン諸島の衛星写真

〔出所： <http://maps.google.co.jp/>〕

このモーケン村落は、縦 50m、横 150m 四方の空間に家が集中している、とても小さな村落です。こうした狭い空間だからこそ口頭伝承も広がりやすいし、情報を共有しやすいという側面があったのではないかと考えています。

以上のスリン諸島のモーケンの事例から何を言いたいのかということ、これまで主に人文社会科学研究者は海に関する知識、あるいは過去の経験に基づく民話を持つことが災害文化の形成にとって重要だと述べてきたのですが、大事なものをどういうふうに伝えるのかを考えなければならぬということなのです。

先ほど見たスリン諸島のモーケン村落であれば、空間が狭いので民間伝承を住民の間に広げる努力は必要ないかもしれません。しかしその一方で、海に関する知識のない、自然から距離を置いて暮らしている現代人が、どのようにして民間伝承を共有し、災害文化を形成できるのかということを考えていかなければならないと思います。

また、災害文化だけを評価するのではなくて、津波防災では当たり前のことですが、高台をいかに確保していくのかということと合わせて考えていかなければ、災害文化を防災に生かすことはできないと、このスリン諸島のモーケンの事例から言うことができると思います。つまり、災害文化というソフト面の防災と高台の確保というハード面の防災を同時に考えていかなければ、本当の意味における防災にはつながらないということなのです。

では、どうやって伝えたらいいのか、またどうやって情報を共有していけばいいのか、そして、どうやって場所を確保していけばいいのかというとても大きな問題に関しては、これから最後に行われるパネルディスカッションで、会場にいる皆さんとともに考えていきたいと思っています。以上です。

弘末：鈴木さん、貴重なモーケンの事例のご報告、ありがとうございました。

ご質問を受けたいと思いますが、いかがでしょうか。議論としてはいろいろなことがあるかと思いますが、それは後ほどのディスカッションにおいてお聞きしたいと思います。鈴木さん、どうもありがとうございました。